

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 夏目漱石 『ころ』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 31 回のツイキャス読書会の課題図書は、夏目漱石の『ころ』です。

[『ころ』については、以前解説しています。](#)

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『ころ』 感想文

先生という人は酷い人だなと思いました。

私という書生に対しても酷いですが、奥さんに対しての接し方がすごく酷いと思いました。

奥さんは、先生と一緒に下宿していた友達が亡くなった時から人が変わってしまって何かを抱えているのだと思っても、それが何なのかを打ち明けてくれないから、ずっとモヤモヤした気持ちで一緒に暮らしていて息がつまりそうな感じで気の毒だなと思いました。

たとえば、Kが先生のせいで死んだとしても奥さんに黙っていたいなら気づかれないようにして欲しかったと思いました。

本当に好きになってしまって誰にも奪われたくない気持ちがあるなら多少卑怯でも仕方ないと思うし、Kに譲る余裕があるならそんなに好きではないような気もするし。

私は、先生の言い訳にしか聞こえなかったのですが、

印象的な文章は

(引用はじめ)

純白なものに一雫の印気でも容赦なく振り掛けるのは私にとって大変な苦痛だったのだと解釈してください

(引用おわり)

自分が意図しなくても思わぬ方向に進んでしまい誰かを不幸にしてしまう事もあるかもしれないけれど、そんな弱い心に負けないで生きて行かなくてはいけないと思う。

だけど、そんな事はきれい事で、人の心はそんなに強くなれない弱いものだという事なのかなと、お話を読んで考えさせられました。

(おわり)

『こゝろ』 夏目漱石 読書感想文

私は淋しい人間です。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上げます。

Kの自殺から、ずっと罪悪感にさいなまれていた。猜疑心に埋もれ、疎外感と孤独にがんじがらめになってゆく。歩む道は暗く、そこに幸せであろう日々の生活は見えてこない。鬱々たる気持ちを溜め、生きているようで生かされているだけの日常は空虚だった。苦しかっただろうと思う。その原因は先生のパーソナリティが「人に対する無理解」。青年期に叔父から受けたうらぎりから、人の徳義を疑うことにつながり、Kを助けたいと願った行動は、善意のつもりだったのだが自らの裏切りと共に破綻へ導いた。

人の心とは、良心と悪意、徳義と不徳義があり、常に二元性なものである。そして欲望一つで豹変してしまうものと学生への忠告の中にこめていた。最後に「凡てを腹の中にしまっけて置いて下さい」と結んである。学生にその因果も押しつけてしまい、応報されるべき結末を自らに課した哀しいエゴイズム。人との関係を結んでゆくの世間であるのに、それがいかに不寛容なのか、その疑問符が話の底辺に流れている。最後の章ですべてを明らかにしたとき、明治天皇の崩御と乃木夫婦の殉死に先生の自死を添わせた理由がすっと落ちない。なぜもっと早く死ななかったのだろう、というKの言葉は、先生にとってはどうだったのかと。明治の精神と殉死する気持ちは現代に生きるわたしには想像でしかない。最後の1ページを読み終え、夏至の明るい夜空のもとで寒心という言葉が浮かび、誰のものかわからない墓に献杯した気持ちだった。

(おわり)

『ころ』の感想文

夏目漱石の「ころ」はこれまで何度か読んでいます。本作は「私」から見た、「私」の「先生」や奥さんとの交流や「私」の実家でのエピソードと、「先生」の「私」に宛てた遺書によって語られる「先生」の学生時代のストーリーとの二重構造になっている。

「私」は「先生」を鎌倉の海で見かけて以来、どこか暗い陰を持つ「先生」に惹かれ、「先生」の警告にもかかわらず、「先生」を頻りに訪ねるようになる。

「先生」自身は友人のKを死に追いやった罪悪感からただ無為に生きているといった感じで、いつも死ぬ理由を探していた。

「先生」はかつて信頼していた叔父に財産を騙し取られた過去があり、それ故に自分は真っ当な人間だとどこかで思っていた。ところがお嬢さんとKとの三角関係の中でKを出し抜こうとした結果、Kを死に追いやってしまった。叔父と同じく欲深く罪深い人間であることを意識したとき、愕然とし、以来その過去を背負って生きてきた。

「先生」の繰り返しの言外の拒絶にもかかわらず「先生」から人生の教訓を得たいと慕ってくれた「私」に対し、自身の死の証人となってくれることを期待し、遺書を遺した。

取り返しがつかないことへの罪悪感を背負って生きている人を描いた作品が共感を誘うのは、人はみなこれまで生きてきた人生の過程で何かしらの罪悪感を抱いて生きているからだろう。

一見ストーリーはシンプルだが、読み終えて何となく釈然としない思いが残る。それは「先生」が自分の自死の理由について自身で分かったかのように説明していても、それは死にたいという気持ちがまず先にあっての後付けの理由に過ぎないからだと思う。より一般化すると人が自分の行動を感情で合理的に説明できると思い込んでいるが、それは後付けにすぎず、そこにズレが生じるということだ。

話は変わるが、百年の時を経てなお、作家が書いたそのままの文字、文章で読めるというのは改めて凄いことだと感じた。

(おわり)

「ころ」感想文

先生はなぜKの死から何年も経ってから自殺したのか？ すぐに死ななかったのはなぜか？

私なりにこの答えを考えることにした。確かに先生が長い間苦しんでいたことは遺書から読み取れる。

しかし、先生はその苦しみとまともに向かい合うことはしなかった。義母に、愛する妻に、最後まで自分の汚点を話すことはできなかった。

それは気の弱さから来たものではあるが、遺書の最後の3行から それだけではないと思った。

私は特に「私は私の過去を善悪ともに他の参考に供するつもりです」が心に引っかかった。

自分の自殺やKへの悪行が他人の役に立つとして正当化している文章。先生は全く自分の行為を後悔していないと感じた。

本当に懺悔する気持ちがあるなら妻に真実を話すべきである。

殉死の名を借りて、死なないはずである。

私あてに遺書を出さないはずである。妻に話し苦しむことが反省であり、Kに対して報いる行為であり、妻を幸せにする手立てにつながるのに先生はしなかった。

とてもとても、苦しく辛いことではあるけれど、妻に話して生き続けてほしかった。

それが無理なら、せめて尊敬してくれている「私」をがっかりさせないために、今のまま生きていくか、または遺書を書かずに自殺してほしかったと思う。

(おわり)

『若者よ！これが人生における必読の書だ！！』

「こころ」という小説は、男女の三角関係は危険！ お金は人を狂わせる！ 失恋しても自殺してはいけない！ など、いろいろ警告してくれているありがたい教養小説だと思いました。

僕は、今回、こころを読んだのは二回目なのですが、この小説を読む前と、読んだ後では、人に騙されにくくなっているのではないかと思います。

Kに対する、先生の責任感が逆に悲劇を産んでしまうのが悲しい。

先生と K の関係を考えると、もし先生とお嬢さんが先に結婚していたとしても、結局、猜疑心の強い先生は、Kとお嬢さんが楽しそうにしているだけで許せないのではないかと思います。

つまり、Kを呼んでしまうと、先生の選択肢としてはどちらにしてもバッドエンドな感じがしました。

最初に読んだ時は、先生って、奥さんにお嬢さんを下さいと、お願いする場面がとても情けないと思ったのですが、今回改めて読んで、先生の身の上を想像すると、両親が立て続けに亡くなり、叔父さんからも騙されてしまっていた為、信頼出来る奥さんに泣きつくのもしょうがないと納得出来ました。

先生は叔父さんの娘と結婚しなかったところが反抗的で偉い。
結婚してたら、『1984』のウィンストン状態でしょう。

しかし、お嬢さんってKといる時の方が良く笑っている気がしたし、男心を弄んでいるような気がして好きにはなれませんでした。

3回目は好きになれるのでしょうか。

そういえば、ノルウェイの森のキズキが直子とワタナベをくっつけさせようとしているのと、先生が細君と書生をくっつけさせようとしているのがなんとなく似てるかもと思いました。

先生からの死のトークン(多崎つくるに出てくる緑川の話のように)を受け継いでしまった、書生のこの後が気になりますが、こんな手紙を受け取ってしまった後では、やはりハッピーな結末は無いだろうなと思いました。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

『ころ』 読書感想文

学生の卒業時、先生はパーティーを催します。

《「世間はこんな場合によくお目出とうといたがるものですね」》とあるように、どこか本心じゃ無い感じですか。意地が悪くないアイロニーという事なのでしょうか。そんな先生を、卒業証書を見せた時珍しそうに嬉しがる父親よりも、かえって高尚に思ってしまう。しまいには父親の無知から出る田舎臭いところに不快を感じ出したりします。先生にかぶれた学生は、卒業証書をぞんざいに扱い、大した事じゃ無いという態度です。そんな学生に父親は心情を吐露します。《しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり、卒業はお前に取ってより、このおれに取って結構なんだ。》親心を感じ、学生は素直に自分の愚かさに気づきます。そんな父親ですが、「学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなっていけない」とかも言ったりします。自分だけの息子としては、純朴であって欲しいのに、大学を出させて、世間体としての息子にも誇りを持ちたいのです。この小説には前述したような、人間は撞着し、その個人と個人の関係となるとお互いの思い込みが多い、という様が沢山描かれています。

学生は、兄姉に両親の近況を綴った手紙を書いている間は、とても感傷的なのに、書いた後、どうすることも出来ない現実を冷静に受け止められている自分に矛盾を感じ、自分は気分が変わりやすい軽薄者なのかと、悩みます。そして、今のような態度でいるより外に仕方がないという思いに至ります。人間を果敢ないものに観じ、同時に人間のどうする事もできない持って生れた軽薄を、果敢ないものと観じます。この軽薄は追従の意味も含まれているのだと思います。この事に思い至った学生が先生の遺書を改めて冷静に読んだとしたら、どんなころ持ちになるのだろう、と思いました。

今の時代だと、何の実績もない人を先生と呼ぶのは、お追従だけです…。

(おわり)

『 Liar! Liar! 』

私は、「先生」が嫌いだった。

最初に先生に出逢ったのは、私が十代の頃だ。「学生」と歳が変わらない私は、学生と同じ目線で先生のことをミステリアスに感じていた。しかし、私が女性として歳を経るごとに、先生の「妻」に感情移入していく。なぜ、Kとの事件を乗り越えてまで一緒になった妻に不安な思いをさせるのか。なぜ、身寄りのない妻をおいて命を絶つのか。私には、先生が身勝手に、自分本位の人間にしか見えなくなっていた。

何も知らない妻は、先生の一举手一投足に疑念を感じ、世間や人間嫌いから自分もその一人として嫌われていると腑に落とすしかない。「最も幸福に生まれた人間の一对」として夫婦になれたのにも関わらず。

意志が強固で実行力のあるKに対する畏怖から、先生の行動に一貫性がなくなっていく。先生自らも勝手に振り回されているのは百も承知だが、嫉妬の前にはなすすべもない。Kの自殺においても自らの所為だと思い込んでいるが、冷静に考えればKは先生と同じ次元ではない。『覚悟、一覚悟ならないこともない』というKの台詞におののいた先生は先走るが、Kの覚悟とは御嬢さんのことではなく、自らの信念に背いて恋に落ちた自らに対してだと感じる。出し抜いた罪悪感から、自殺が自分の所為だと思うのは先生の驕りかもしれない。兎にも角にも、御嬢さんと一緒になれた後は、自らの深い淵は自らの中で留めておくのが、強さであり愛情だと私は思っていた。

この感想文で、再び「先生」に出逢った。先生は学生に遺書を送る際、「あなたには嘘をつきたくない」と人を信じて死にたいという欲望を果たしたが、妻には知らせないでほしいと書いた。ひょっとしたら、妻を苦しめたにしても先生なりの愛し方だったのかもしれない。私は江國香織氏の「人は守りたいものに嘘をつく」という言葉を反芻していた。明治天皇に殉じた乃木大将の妻の名前も先生の妻と同じ名前だから、まさか…と思っていたけれどほっとする。

先生、ごめんね。先生なりの愛情に目を向けなくて…あくまで先生なりだけど。先生の自殺も、Kと同じく自分を許せなかったんだよね。伯父と同じ悪人に堕ちてしまったことを。今度、出逢うときはもう少し理解できるかも。最後にB`z の [「Liar! Liar!」](#)の歌詞を思い出したよ。

「愛する人がハッピーになりやそれでいいや♪」

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『私は★淋しい★人間★です』

先生も K も故郷を捨てた孤独な人たちである。

だからこそ、彼らは、憂世の儚さを痛切に感じるのである。

殉死というのは、薄志弱行なる魂を、永遠に連なるものとして生かそうとする営みである。死の道だけが残された自由だと悟った先生は、時代遅れのやりかたに新しい意義を加えることを思いつき、明治の時代精神に殉ずる決断をする。

『三四郎』の与次郎は、私淑している『偉大なる暗闇 広田先生』を世の中に紹介して、新時代の青年として一旗揚げようとした。もしかすると、この学生もどこか、与次郎と同じように野心があったのかもしれない。

しかし、付き合うに連れて、先生に影のようにつきまとう『淋しさ』に次第に惹かれてしまった。そして、偶然にも先生の運命の立会人となってしまった。

(引用はじめ)

あなたは私に会ってもおそらくまだ淋しい気が何処かでしているでしょう。私には、あなたの為にその淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。(上七)

(引用終わり)

『こころ』の先生も K も、もともとは薄志である。それなのに、なぜが、『意志の力を養って強い人間になる』という悲壮感で踏ん張ろうとした。その気合いは、新時代の青年だった彼らの矜持だったのかもしれない。

意志というのは、ショウペンハウエルによれば、生まれる以前の根源的な状態を指すものだ。人間の認識を越えた状態にあるものだから、気合いでは強くなりようがない。

その証拠に、お嬢さんへの恋愛感情すら、意志によってコントロールできていない。

『私は淋しい人間です』

薄志弱行を、精神的な向上心で乗り越えんとする魂胆が、人を淋しくするのだ。

一方『三四郎』の広田先生は、滑稽である。退屈である。目的もない。でも、淋しくもない。

与次郎が土産に買って来た馬鹿貝のつけ焼を、「硬いね」といいながら、いつまでももぐもぐと噛んでいる広田先生のペースも、やりきれないが、それでも、薄志弱行ながら生きていく上では聡明な態度かもしれない。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください http://bookclub.tokyo/?page_id=2343